



シャローム/国連 - NGO 報告 第2部

シスター アイリーン・ライリー

シスター キャシー・シュミットゲン

「私たちのカリスマは絶えることなく、今も私たちの共同体において、発展し続けている。この共同体は、過去によって豊かにされ、会を今、開花させ、さらに未来に向かわせることを可能にしている。」(会憲序文)

30年以上にわたり、この言葉に私たちは導びかれてきました。今回は、会憲「**遣わされている**」が承認されて以来7回目の総会に当たります。会憲を道案内として、私たちは7回集合しているということです。私たちは、何を「開花させている」のかを言葉に表現することについて、毎回大変な努力を費やしました。

私たちは...

- 貧しい人々の困難を自らのことと受け止めてきました;
- より正しい真の人間社会のためと信じ大胆に行動してきました;
- 貧しい人々に寄り添うために奮闘してきました;
- 大地の叫びとその住人の叫びの双方に耳を傾けてきました;
- 「愛は待つことができない」を改新しながら実践してきました。

未来に向かうチャレンジとして、今私たちが求められているのは何なのでしょう。この特別な時代に見捨てることのできない「緊急の必要」とは何なのでしょう。

前回の総会で集合して以来、現在までの間、次のような事柄を私たちは目にしてきました

- 気候変動抑制に関するパリ協定
- 世界中に多発するテロ襲撃事件
- 前例のないほど増加する移民難民移動による危機
- フランシスコ教皇
- ラウダート・シ
- 持続可能な開発目標
- 伝染病エボラの流行
- ネパール大地震
- ボコハラムによる 276 人の女子高校生の誘拐
- ブラジルと韓国における大統領弾劾

- マララ・ユサフザイのノーベル平和賞受賞

そして修道会内では、次のようなことがありました

- 国際統一修練院設立
- 修道会リーダー、財務責任者と養成担当者との国際会議
- シャロームセミナー
- 全管区評議会の最初の国際リーダーシップ会議
- 約 550 人の会員が亡くなり、40 名あまりの新会員が誓願を受けました。

さて、自問してみましょう。2017 年そしてその先に向かって、何が開花しているのでしょうか。

私たちの答えが求められている未来への挑戦とは何でしょうか。

この特別な時に、無視できない緊急の必要とは何でしょうか。

こうした問いに答えるための指針として「ラウダート・シ」を取り上げるべきとおもいます。皆さんに配布されている結びの章に、教皇フランシスコは、こう書いておられます：

「私たちに惜しみない献身を呼びかけ、自分のすべてを差し出すよう促される神は、歩み続けるために必要な光と力を与えてくださいます。私たちを深く愛してくださるいのちの主は、この世界のただ中にいつもいてくださいます。主が私たちを見捨てることはなく、私たちが孤独のうちに捨て置くことはありません。主がご自身をわたしたちの地球と決定的に結ばれ、またその愛が、前へと向かう新たな道を見出すよう、絶えずわたしたちを駆り立ててくれるからです。主はたたえられますように。」(ラウダート・シ 245)

この結論の言葉で、教皇フランシスコは、「ラウダート・シ」が訴えている挑戦を要約しておられます。私たちを「世界のただ中に」に呼び、そして「前へと向かう新たな道を見出すよう私たちが駆り立ててくれる」チャレンジです。こうした課題事項をより綿密に吟味してみましょう。

始めに: 知恵を分かち合うこと

私たちの総会のテーマは、「わずかなものに満足する」ことへの勧めを思い出させてくれます。教皇フランシスコは、自分のすべてを差し出すよう、私たちは促されていると言っておられます。

「わずかなものに満足する」よう、「すべてを差し出す」ようという招きは、また、国際性の増長、協力関係の拡大、そして会員減少に由来する問題など、変わりつつある私たちの修道会の現実を受け入れるようにという呼びかけとして、聞き入れるべきでしょう。私たちはどんどん少なくなり、ますます年を取ってきているのです。

しかしながら、修道会全体対話の返答のひとつに、会員数の減少を嘆く代わりに、共同体としての知恵を重んじるべきではないかという提案がありました。「自らのすべてを差し出す」ことは、共同体で過ごしてきた修道生活の年月を見つめ直し、私たちが有している知恵

を再評価するという意味でもあるでしょう。「緊急の必要に応え、貧しい人を優先し、世界的視野を持って、教育に従事した」この184年間に、私たちは何を学んだのでしょうか。
(遭わされている、序文)

過去には、こうした共有の知恵が、パキスタン、南スーダン、アルバニア、韓国、スウェーデン、リベリアそしてベラルーシのような国々へと、私たちを導きました。私たちは50カ国以上の国々に赴きました。ある時は私たちの見識が去るべき時を教えてくれ、またある時はそうした国々のいくつかの地に、より深く根を張ることを助言してくれました。その知恵が、小さな村や部落まで、また数々の主要都市にも、幼稚園や大学に、難民キャンプや病院、そして教会や養老院へと私たちを導いてくれたのです。

私たちは、こうした経験からどのような知恵を現在の世界にもたらすことができるのでしょうか。あるいは、修道会全体対話を通してシスター達が話していたように、私たちは時のしるしを目の前にしながら、どのようにしたらカリスマを忠実に生きることができるのでしょうか。

国連活動に所属団体として参加した、「誰一人も見捨てることなく」というテーマの討議の場では、長年貧困問題に関わってきた私たちの経験や幅広い知識をもって、貢献することができました。また多様な状況での教育に携わった豊かな経験を通して、私たちは、現在進行中の世界的初等教育の必要性に関する国連対話に参加しています。

シャロームネットワーク内で共有した経験のおかげで、何年も前から人身売買阻止委員会を立ち上げ、毎年青年成人を対象とした教育の日を催しているカナダのシスター達のように、人身売買抑止を目指す地域的な活動にも、限らない貢献をもたらすことができました。

ラウダート・シの言葉である、「私たちのともに暮らす家を大切に」守っていくための尽力として、持続可能な資源の有効さを地域に納得させ、学校に太陽光パネルを設置する融資を得たネパールのシスター達の活動は、具体的な例のひとつです。

セントラルパシフィック管区のセントルイスの共同体に住む現役を退いたシスター達は、シャロームの価値観に賛同し、シャロームシニアクラブを結成しました。シスター達は、地域で起こった無武装の黒人男性が襲撃された事件の後、人種差別問題に関する一連の教育活動を企画しました。

ブラジルの学生たちは、国際平和デーに当たり平和の折り鶴を制作し、彼らの平和を願って路上生活者に手渡しました。

ドイツとオーストリアでは、親のない難民孤児にドイツ語と英語を教えています。

再び問います、私たち共同体の経験や知恵を、修道会間でまた外の世界でどのように共有することができるのでしょうか。

次に: 世界のただ中で

ラウダート・シの最終章の次の文に注目してください、「いのちの主は、この世界のただ中にいつもいてくださいます。」1960年代に、「世界を止めろ、出ていきたいから」という題の、ニューヨークで流行したミュージカルがありました。明らかに当時、私たちの多くはそんな感情を抱いていました。しかし教皇フランシスコは、「いのちの主が居てくださる」のは、「この世界のただ中」なのですよということを思い出させてくださいます。私たちは世界から出ていくことはできません、それどころか、「世界のただ中に」出ていくように呼びかけられているのです。

教皇フランシスコの言葉は、現代世界憲章のチャレンジを思い起こさせてくれます、「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に、貧しい人々と苦しんでいる人々のものは、キリスト者の喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事からで、キリスト者の心に反響を呼び起こさないものはひとつもない」。

現在私たちの心に反響を呼び起こしているものは何でしょうか。修道会の全体対話で、皆さんは、シスター達は、被造物の保護、女性子供の窮状、移民難民移動、人身売買そして世界のただ中の主要地域で極限状態にある人々について、言及しました。

私は初めて人身売買の現状を説明された時のことをはっきりと覚えています。私は、ショックを受けました。その時まで、女性や子供が、この時代に奴隷として売買されることなど想像もしていなかったのです。現在、世界の中心で、この問題は避けがたい事実なのです。

「世界のただ中で」、6500万人もの難民が、家を、安全を、自由を求めているという事実を見つめないわけにはいきません。

「世界のただ中」を移動し続けながら、私たちは何を見出すのでしょうか。私たちの共同体としての応答を求めているのは何でしょうか。この質問について考えるには、次の問いに答えることが手助けになるかもしれません。「世界の中心」を見つめる時、何があなたの心を痛めるのでしょうか。「現代の人々の喜びと希望、悲しみと苦しみ」は、あなたの心の中のどこに反響を見つけられるのでしょうか。

そしてまた問います、世界のただ中で私たちの答えを求めているのは、何でしょうか。

第3に: 貧しい人々の叫びと大地の叫びに耳を傾けること

「ラウダート・シ」には、「主がご自身を私たちの地球と決定的に結ばれた」とあります。あるいは、神学者エリザベス・ジョンソンが解説しているように:「創造の順序が織りこまれていく豊かなタペストリーの全体は、それ自身本質的な価値を有している、なぜならそれは主が、創造をつかさどられた場所であるから。」(生ける神の探求、E. ジョンソン、p. 198) 私たちは、すべての被造物は神の顕示であるという認識をいっそう確かにするようになっています、ジョンソンがまた言っています、「もし地球が真に、神聖な存在の秘跡であるとしたなら、この絶え間ない破壊は、。。。この上なく罪深い冒瀆である」と。(同上、

p. 197) 生態の一種でも絶滅に迫りやることは、聖書から1ページを引き裂くようなものだと言っているのです。その結果、私たちに伝えられる神の顕示には欠如があるということになるのだと。

教皇フランシスコは、2016年の被造物を大切にす世界祈願日へのメッセージとして、慈しみの行いとして私たちの共通の住まいである地球の保護を、含めることを提案されました。

精神的慈善の行いとしての私たちの共通の住まいの保護は、「神の世界を感謝のうちに観想する」(ラウダート・シ、214)ことを促しています、そして「こうした観想は、神が私たちに届けようとお望みになる教えを、ひとつひとつのものの中に発見させてくれます。」

(同上、85)

ご存知のように、私たちの先入観や慣習に対する挑戦である聖書的身体的慈善の行いは、飢えるものに食べ物を与え、乾いた人に水を飲ませ、病人を見舞うように、私たちを促しています。呼びかけに応えるのは、食べ物を求められたときに成すように、簡単な行いなのです。しかしまた、家を追われた難民の家族に住処を提供することや、貧しい人々への援助供給を国に緊急要請をするというような、より負担の大きい努力も要求され得るのです。

身体的慈悲の行いとして私たちの共通の住処を守るためには、「暴力や搾取や利己主義の論理と決別する、日常の飾らない言動」が、また「より良い世界を造ろうとするひとつひとつの行為において感じられる」愛が求められているのです。(同上、230-231) 物資の再利用や資源の消費に責任を持つことなどの日常のささやかな行いも、こうした招きへの答えになります。

私にとって、2016年のシャロームセミナーの記念すべき思い出の一つは、早朝6時に総本部の前に皆で集まっていた時のことでした。観想の祈りが終わってから、私たちは、門の外の道を清掃するために静かに坂道を降りていきました。無言のままごみを集めながら、その朝は私たち皆にとって、「ともに暮らす家」という言葉の意味について深く熟考するよい機会となったのです。

私たちはまだ自問していました、「ともに暮らす家を大切にす」ことへの答えとして、より様々の活動企画や態勢があるのではないかと考えていました。

教皇フランシスコは、環境と経済、社会と文化に関連するものをすべて結びつけて「総合的なエコロジー」と名付けました。私たちの「使い捨て文化」(同上、22)に挑戦され、また、世界の南北間に存在する「エコロジカルな債務」(同上、51)について説明されておられます。現在のこのような環境危機がより貧しい人々の生計に不均衡な打撃を与えていることはまた私たちの熟知するところです。

「気候は共有財のひとつであり、すべての人のもの、すべての人のためのものです。」(同上、23)しかしながら、先進諸国は天然資源を公平な分配より以上のはるかに莫大な浪費をしています。その結果貧困層は、配分量を受けられるどころか逆に極端に不平等な苦境に追い込まれているということも明らかです。

ではまた問います、2017年にまたその先に向かって「私たちがともに暮らす家」を大切に守っていくとはどういうことでしょうか。

どのように私たちは「貧しい人々の叫びと大地の叫びの双方に」(同上、49)に耳を傾けていると言えるのでしょうか。

最後に: 前に向かう私たちの新たな道

「ラウダート・シ」が推し進めている「世界のただ中に」生きるというこのチャレンジを私たちが受け入れたなら、私たちの現実はもはや静止したものではなく、「主の愛が、前へと向かう新たな道を見出すよう、絶えず私たちが駆り立ててくれる」ことに気づくでしょう。

こうした未来への新たな道は、いまだかつてなかったほどにテクノロジーが私たちが結びつけ、油断をすれば私たちの生活を縛りかねない時代に生きている事実を考慮して、描かれるでしょう。私たちは政治情勢の急激な変化の時代に生きている。私たちが家と呼んでいる惑星の存在そのものが危険にさらされている時代に生きている。私たちは、歴史上かつてなかったほどの多くの難民移民が新しい家を求めている時代に生きている。

私たちは、毎日、ポジティブなこともネガティブなことも併せた混沌の現状に直面しているのです。しかしながら、「主の愛が、前へと向かう新たな道を見出すよう、絶えず私たちが駆り立ててくれる」のです。世界のただ中に、そうした私たちのためのチャレンジがあるのです。

私たちノートルダム教育修道会は、前へと向かう新たな道を見出す旅へただひとつの展望を持っています。私たちは「イエス・キリストが1つにするために遣わされたように、全生涯をかける」(会憲、4項)ことを促されているという深い信念に根差しています。ですから、私たちが見出す未来への道は対話のそれであり、さらなる理解を深めるよう、そして常に一致を価値づける対話の道です。5年前に私たちは言いました、「私たちは、生活様式として対話を取り入れる」と。私たちが「世界のただ中に」5年前には想像もできなかったような世界に、私たちが駆り立ててくれることを神に委ねる時、私たちは再び対話を必要とするでしょう。

今朝私たちが始めたところで、終えましょう、「痛みを、身をもって感じる」ようになること、「不正義の根源を取り除くように、積極的に活動する」、「信念をもって不正義に対抗する」、「簡素に生き」、「労働を正しく評価し」という「会憲、17項」の呼びかけと共に。

再度問いましょう、こうした絶え間なく変化し続ける現状において、世界のただ中へと推し進めていく私たちの道はどのようなものでしょうか。

シャローム/国連 - NGO 報告 第2部終了後 熟考のための質問

現在の世界に、私たちはどのような知恵をもたらすことができるでしょうか。修道会間でまた外の世界で、共同体としての知恵見識をどのように分かち合っていくことができるのでしょうか。

世界の中心を見つめる時、あなたの心を痛めるものは何でしょうか。世界のただ中で、何が私たちの応答を求めているのでしょうか。

2017年に、またその先へと「私たちがともに暮らす家」を大切に世話をするということはどういうことなのでしょうか。私たちは、「貧しい人々の叫びと大地の叫びの双方」に耳を傾けているとどのように言えるのでしょうか。

このたゆまなく変化し続ける現状において、世界のただ中に向かう私たちの道はどんなものなのでしょうか。